

浜田温泉の歴史

浜田温泉は、明治12年に地元の高橋増吉氏が温泉を開掘したのが始まりです。このことについては『豊後御越町志』（明治35年発行。「御越」は亀川の旧町名。）に、次のように記されています。

当時は区内（古市区）には温泉場がなく住民は入浴に苦慮していた。ある夜、高橋氏の夢に錫杖を携えた老僧が現れ、温泉を開くべしとのお告げがあった。翌日老僧が示した同氏の耕作地を見ると、そこは毎年作物が早く熟する場所であった。このことを地区民に話し一緒に掘ってみると温泉が湧き出たが、水分が多くぬるいため入浴には適していなかった。この後同氏は独りで苦労し三年余のちによく公衆浴場を完成するに至り、自宅を入浴者の寓舎とした。泉質は諸病に効果があったため各地からの浴客も増え、温泉場周辺に集客が形成されるようになった。

また、浜田温泉前に建立されている永田重郎頌徳碑によると、その後、明治22年には、のちに御越貯蓄銀行頭取となった同氏により温泉場としての整備が進められ多くの浴客で賑わいました。この頃の御越町の人口約3,500人に対し旅客は60,000人を超え、その多くは浜田温泉にも入浴したことでしょう。

当時の温泉の東は海に面し、あの三方は田んぼが広がり、温泉の周りには12軒ほどの旅館が建ち並んでいました。浴場は石造の構造で男女2箇所の浴室をそれぞれ数区に分け、また、砂湯もあり、満潮時には海水が浸入し海水浴を兼ねることもできたといわれています。

大正9年頃には、「浜田鉱泉」とも称され、御越町により1階は男女各泉浴2、砂湯1、2階は料亭の、木造2階建てに改築されました。

別府市と合併した昭和10年には、浜脇高等温泉を設計したことで知られる別府市技師池田三比古の設計により再改築されました。浴室はひょうたん形の浴槽に蒸湯が併設され、外観は唐破風の玄関の上に千鳥破風をのせた重厚な宮造りで、別府市に現存する木造温泉建物としては最も古いものです。この建物がここに復元された浜田温泉です。

昭和40年代には2階部分を増改築し、町内公民館として使用されてきました。

平成14年3月には東側に新浜田温泉が新築されたため、翌年に解体されましたが、同16年に市内の篤志家から建築費として6,500万円の寄付があり、建築当時の姿を残すこととなりました。

浜田温泉資料館について

旧浜田温泉は、もともと地元の市営浜田温泉でしたが、向かい側に新しい浜田温泉が建設されたため、「旧浜田温泉」「新浜田温泉」として区別しています。

新浜田温泉の建設により旧浜田温泉は将来の復元を視野に入れて、図面を作成しながら解体されましたが、建設費をすべて負担するという篤志家からの6500万円の寄付により平成17年1月に復元工事に着工、同7月に完成しました。

外部は、当初建設時のとおりに再現し、旧部材を可能な限り使用しました。内部は浴槽等をそのまま残し資料室とし、一方の浴槽は上部を板張りとし、自由に利用できるコミュニティーフロアとしました。

◇復元建物概要

延床面積 158.86 平方メートル

　　コミュニティーフロア部分 49.5 平方メートル

　　資料室部分 53.2 平方メートル

外部仕上げ・・・壁；漆喰塗り 屋根；銅版一文字葺き

内部仕上げ・・・床；板張り 壁；漆喰仕上げ 天井；格天井

その他・・・・解体時に保存した部材を、復元時に再使用した。

小屋組み・・・5ヶ所

肘木・・・・・・5ヶ所

千鳥格子

唐破風まわり（柱を除く）

格天井の枠部分

他の装飾材

全体の旧部材の使用率…約2割

◇見どころ

今ではあまり見られなくなった地下式の浴槽や併設されている蒸し湯、さらには装飾を施した唐破風玄関の上に千鳥破風をのせた重・厚な宮造りなど、建物自体が昭和初期の別府の温泉文化を知るうえでの貴重な資料です。